

通巻850号を迎えて 一第7代編集委員エッセイ

Modern Media



「働き方改革」で、日本沈没!

昭和医科大学医学部 医学教育学講座 教授

いずみ み き
泉 美 貴

Miki IZUMI

近年、「働き方改革」が医療界にも大きな影響を及ぼしている。もちろん、過重労働による健康被害や自殺は防がなければならない。しかし私は、この改革が本当に日本の将来にとって正しい方向なのか、強い疑問を抱いている。

日本は資源に乏しく、人口減少が加速する国である。そんな国が世界と伍していくためには、一人ひとりが能力を高め必死で働く以外に道はない。ところが現在進められている「働き方改革」は、能力向上の議論を置き去りにしたまま、単純に労働時間だけを減らしている（「働かない改革」）ように見える。

医師の世界も同様である。働く時間を制限しても、患者数や医療に求められる水準、そして評価基準は変わらない。自己研鑽を誰かが保障してくれるわけでもない。結果として起こるのは、効率化ではなく経験不足である。これでは医師の力量が向上するはずがない。

そのむかし、日曜日の早朝に実家から電話がかかり、眠気眼で受話器を取ると、「日曜日だからって、どうして長く寝ているの?」と母から呆れられたことがある。戦前・戦中・戦後を生き抜いた世代の勤勉さと忍耐強さは、次世代の私の想像を遙かに超えている。その勤勉さこそが、日本を焼け野原から有数の経済大国へと押し上げたのである。ところが、私より一世代下がると、働き方改革の名の下に余りにも働かなくなってしまった。

欧米の一流医師たちは土日もなく働き、研究し、学会発表をし、論文を書く。私が尊敬する皮膚科の大家である大原國章先生（赤坂虎の門クリニッ

ク院長）に、「どうしたらそのような素晴らしいプレゼンテーションができるのですか」と尋ねたことがある。すると先生はひと言、「時間をかけること」と言われた。優れた仕事を生み出すには、天才であろうと凡人であろうと、最後の最後まで考え抜き、準備する時間がどうしても必要なのである。

近年、若い医師の間では「直美」（ちよくび：研修医を終えて直ぐに美容形成外科に進む）や「直産・直在」（ちよくさん・ちよくざい：研修医を終えて直ぐに産業医や在宅診療に進む）に代表されるように、負荷の少ない環境を選ぶ傾向がみられる。ヒトは本来、易きに流れる生き物である。だからこそ社会には、成長を促す仕組みが必要なのである。

私はこの流れにどこか既視感を覚える。「ゆとり教育」である。子どもたちの負担を減らそうという善意から始まった改革は、後に学力低下という問題を招き、方向転換を余儀なくされた。私は、働き方改革も同じ道をたどると予想している。

一人の命を守ることは極めて重要である。しかし同時に、国民全体の能力低下という静かだが国家存亡の危機にも目を向ける必要がある。働き方改革は「働かない改革」であってはならない。必要なのは労働時間の一律規制ではなく、成果と成長を正當に評価する仕組みへの転換と考える。

もっとも、この原稿を書きながら気がついた。モダンメディアの編集会議も、19時開始では働き方改革に怒られる!



※本画像は生成 AI を用いて作成したイメージです。